

人類・歴史・共生

21世紀における「歴史学の課題」

パネリスト：羽田正＋橋本毅彦＋中島隆博＋小林康夫(司会)

ディスカッサント：信原幸弘＋原和之＋村松真理子

人間の危機と歴史

小林　いま我々が置かれている時代はグローバリゼーションなどとも言われているわけですが、この動きのなかで重要なのは、人間についての思考が大きく変化せざるをえない時期にきているということだと思います。humanities といわれる人文科学、人間についての思考をいわば学問として支えていた我々の学問そのものが、世界の歴史のなかで変わらざるをえない。従来の「人間」のコンセプトをそのまま保持するというだけでは立ち行かない、そういう時代になってきている。こうした時代における課題として「共生」を思考するのが、我々 UTCP の活動の軸なのです。

今日は、共生の問題を歴史から考え直すことをしたいと思います。例えばテクノロジーによって、あるいは自然科学によって、あるいは地球環境の問題によって、あるいは国際紛争を一向に解決できない無力な政治によって、あるいは資本主義そのものによって、おそらく従来の人間についての学問の根幹を成していたコンセプトそのものが危機にあり、もう一度それを再考することを問われているのだとすれば、その人間の危機は、おそらく歴史という問題と密接な関係にあるに違いない。いまほとんど前提を深く掘り下げることなく、私があえて使う「人間」という言葉のコンセプトは、ミッシェル・フーコーの仕事を待つまでもなく、西洋において、ある歴史的な文脈で生

まれてきたものであるに違いないわけですし、同時に、この人間というコンセプトそのものが、おそらく歴史というコンセプトと決して無関係ではなかったに違いありません。実際、歴史という考え方そのものが誕生しなければ、あるいは世界史の誕生と言ってもいいかもしれませんが、こうした普遍史の誕生なくして、人間の誕生はなかったのではないか。もし、人間の危機がいま我々の生きる時代のリアリティとしてあるならば、もっとも重要な問題は、歴史の問題なのかもしれません。

例えば我々が歴史について考える場合、マルクス主義的な歴史観や黙示終末論的歴史観といった歴史観や歴史についてのヴィジョンを考えるというアプローチがあるでしょう。しかし今日は、我々が歴史を「書く」ということを問題にしたい。我々が歴史を紐解き、歴史を書くというということと、さらには書くということそのものの歴史性を問うことは、きわめて根源的なところでつながる問いだと思うからです。

そこでまず、羽田正さんにお話をお伺いしたいと思います。羽田さんと私がお話をすると、西洋中心主義的歴史観の脱構築ということが問題となります。もっとも脱構築という言葉は羽田さんはきっとお嫌いでお使いにならな

いでしょうが——、ともかく、私はどちらかという西洋主義的に、先ほど述べた問題提起にしてもきわめて強い西洋的な文脈において言っています。つまり、フーコーを引用しても西洋における西洋批判の文脈は結局、西洋中心主義的なものなのです。この問題に対して、先ず羽田さんにお話しいただきます。

そこから考えられる非西洋における歴史の問題について、中国哲学を専門とする中島隆博さんにコメントしていただきます。

また、冒頭でグローバリゼーションという言葉を使いました。歴史が動くということについて、それは政治権力の変遷だけに収まるものではとうていなく、技術やメディアあるいは生態系など、我々がいままで歴史学分野だと思っていた領域をはるかに超えた物質的なものについてまで、歴史の考え方を変えなければならないのかもしれない。例えば鉄のテクノロジーが歴史を作ったのであって、人間の主体が作ったのではないのかもしれない。この問題提起について科学史と技術史を専門とする橋本毅彦さんにテクノロジーの歴史という視点から、西洋＝非西洋、あるいは世界の歴史を書くときの問題についてコメントしていただければと

思います。それではまず羽田さんに、歴史学者としての現在と、問題は何なのかを説明していただきます。

羽田 通常、歴史学者は、哲学者とあまり本格的な議論をしません。話が通じないのです。哲学者が歴史とは何かという問いを立てるのに対し、歴史学者は、歴史はすでにそこにある枠組みだと考え、その中で文献を読み実証的に史実を明らかにしようとしますから、なかなか歯車がかみあわないのです。そこで今日は私なりに歴史を外から眺めるように努力して、何とか哲学の専門家と話が通じるようにしてみたいと思います。

最初に、現在において歴史や歴史学を考える上で私が前提としていることを説明します。グローバル化が進む現代世界では、世界全体で取り組むべき課題が山積しています。昨今の経済危機がそうですし、環境の問題にしてもそうです。それらの問題を解決するためには、人々が「世界市民」、あるいは「地球市民」というアイデンティティを明確にもつことが必要だと私は考えます。人々が共有できる「一体

前提

- ◎ グローバル化が進む現代世界では、世界全体で取り組むべき課題が山積している。
- ◎ 問題解決には、人々が「世界市民」としてのアイデンティティを明確に持つことが必要である。
- ◎ 人々が共有できる「一体としての世界の歴史（世界史）」は、このアイデンティティ獲得に寄与するはずである。しかし、そのような「共生の世界史」は、まだ存在しない。
- ◎ 日本には、世界各地の歴史を研究する研究者が揃っており、新しい世界史を考える条件が整っている。

としての世界の歴史」、これを「世界史」と私は仮に呼びますがけれども、そういう世界史があれば、人々は世界的アイデンティティを持ちやすくなるのではないのでしょうか。みんなが同じ歴史を共有していると思うようになれば、それに伴って世界市民の意識を持つ人が多くなると思うのです。しかし残念ながら私が知る限り、そのような「共生の世界史」はまだ存在していません。

この前提の上に立って歴史学を論じるにあたって、まず歴史学とはどういう学問なのかという問題を考えなければなりません。ここで言う歴史学とは、いわゆる近代歴史学のことです。18世紀の末頃から19世紀にかけて徐々に体系化された学問です。「事実是一体どうであったのか (wie es eigentlich gewesen)」という有名なランケの言葉

近代歴史学の誕生と役割

◎ 「事実是一体どうであったのか (wie es eigentlich gewesen)」: 文献学 (philologie) の方法を用いて、過去の事実 (史実) を確定する。

◎ 歴史学は過去の事実を明らかにする学問だとの認識
◎ ナショナリズムの運動と共鳴し、同じ過去を共有する人々を作り出す。

◎ 「私たちの歴史」⇔「彼らの歴史」

◎ 日本では、「歴史(西洋史)」(1887年)、「日本史」(1889年)、「東洋史」(1907年)の順に大学で講座が設立される。

に表されますように、歴史学は、過去における事実(史実)を問題にします。当時やはり学問としての地位を固めつつあった文献学(フィロロジー)の方法を取り入れ、厳密な史料批判によって史実を確定するというのが近代歴史学の基本的な方法で、これは今日に至るまで変わっていません。

「事実是一体どうであったのか」を問題にするわけですから、歴史学とは過去の事実を明らかにする学問である、としばしば考えられます。しかし実は、ご承知のように、歴史を書く人の立場によって史実が異なることはよくあるのです。過去の「事実」は決して一つではありません。いずれにしても、もしあるグループの人々が過去の「事実」を共有していると信じるようになれば、その人々の間には間違いなく仲間意識が生じます。逆に、仲間意識を持っている人々は共通の過去を有して

いると考えるということもできるでしょう。歴史はある人間集団の団結を強めるのに確実に役立つのです。

18世紀末から19世紀にかけて、ユーラシアの西方地域で、ナショナリズムの運動が盛んになって

きました。同じ頃、近代歴史学の祖と言われるランケは、『プロイセン史』『イングランド史』などを著し、ミシュレは『フランス史』を出版しています。19世紀のユーラシア西方地域において、ナショナリズムの運動と新しく創成された歴史学が共鳴しあって、互いの考え方や叙述方法に影響を与えていったことは間違いのないと思います。歴史学の分野では、例えば、「プロイセンは独自の歴史を持っている」、あるいは、「フランスの歴史は他の国のそれとは違う」という考え方に基づいて各国史が記されます。簡単に言うと、私たちに「私たちの歴史」があるというわけです。それがナショナリズム運動と結びつき、プロイセン人、フランス人などの意識を持つ人々が増えて行きます。それがさらに進んで、国民国家であるドイツの統一やフランスの成立へとつながって行くのです。

ここで注意していただきたいのは、「私たちの歴史」を作るということは、そこに入らない人々をも同時に生み出すのだということです。つまり、「私たちの歴史」と一緒に必ず「彼らの歴史」が作られるのです。ドイツにはドイツの歴史があり、フランスにはフランスの歴史があるということになります。もう一つ、後にもう一度触れるように、世界というレベルで考えると、ヨーロッパと非ヨーロッパの間に強固な区別がありました。ヨーロッパには歴史があり、非ヨーロッパには歴史がないととらえるのが、初期の近代歴史学の特徴です。このように、学問的な営為としての近代歴史学は、自と他を分ける運動としての性格を持っていたと私は考えます。

明治日本はドイツで起こった近代歴史学の運動をいち早く取り入れます。東京大学が設立されて10年後の1887年、ドイツの大学制度をそのまま採用して、歴史学の講座が作られます。ランケの弟子のリースというドイツ人が来日し、そこで歴史を教えるのですが、それはいわゆるヨーロッパ地域の歴史でした。ドイツで「歴史」と言うと、ドイツとその周辺、ヨーロッパ地域の歴史を意味します。いまの西洋史です。そこに日本や日本人は登場しません。

これに対して、「おかしい、これは私たちが習っても意味がない」と考える人たちもいました。日本の大学で歴史が教えられるのに、それが「私たちの歴史」ではなく、「彼らの歴史」なのですからこの批判は当然でしょう。かくして2年後の1889年には、国史学の講義が始まります。これが「私たちの歴史」です。これ以前から、日本列島には歴史記述の独自の伝統がありました。それを利用しながら、このときから日本史の研究が本格的に始まるのです。

東洋史の講座がはじめて京都帝国大学に置かれるのは1907年のことです。これはちょうど日露戦争の後のことです。東京帝大には1910年に東洋史講座が設立されます。それに先立って公的な場で「東洋史」という概念が初めて説かれたのは1894年、日清戦争の頃です。この当時の日本にとって、「東洋」という概念は非常に重要でした。そこへ進出するという意味でも、そこと連携して西洋に対抗するという意味でも、「東洋」という地域を設定することには大いに意義がありました。それをナショナリズムとは呼べませんが、東洋の実体化のために東洋が歴史を持つことは当然必要だったのです。ここに今日まで続く日本史・東

日本における世界史認識の現状

- ◎ 世界には複数の文明が誕生した。
- ◎ 文明（地域世界）はそれぞれ独自の歴史をたどるが、相互に影響を与え合い、時とともに結びつきを強める。
- ◎ 16世紀以後の「ヨーロッパ」の世界各地への進出によって、世界の構造化が進む。
- ◎ 18-19世紀の「近代」に入って、「ヨーロッパ（西洋、欧米）」文明の優位が決定的となり、その影響が世界全体に及ぶ。

社会において求められていることを提供するという役割を持っていたのです。だからこそ大学に講座が作られ、今日まで学問として続いてきているのだと言えるでしょう。

さて、その歴史学は、現在どのような状況にある

のでしょうか。ここでは「世界史」という概念とからめて、その現状をお話してみます。歴史学における叙述の枠組みとしての「世界史」は第二次世界大戦後に生まれました。それまでの「東洋史」と「西洋史」を合体させたもので、元来そこに日本史は含まれていません。高校の教科としてはもう60年近く教えられていますが、大学にはなぜか「世界史」講座はほとんどありません。

高校の世界史教科書などを通じて、私たちが一般に持っている世界史の認識とは次のようなものではないでしょうか。先ず、世界には複数の文明が誕生します。文明は、地域世界と呼ばれる場合もあるでしょう。文明はそれぞれが独自の歴史をたどりますが、相互に影響を与え合い、時とともに結びつきを強めていきます。16世紀以降になって、文明の一つである「ヨーロッ

洋史・西洋史の三本立て歴史研究の大枠が固まります。西洋史、日本史、東洋史がその順に大学の講座として採用されることには、それぞれ十分な理由があったわけでは

ありません。繰り返しますが、日本に最初に導入された近代歴史学、つまり西洋史は、日本人が当時追いつかなければいけないと考えていたヨーロッパの国立大学という制度とそこでの講義をそのまま取り入れたのです。しかし実際にその学問を学ぶと、私たちに「私たちの歴史」があるはずだとすぐに気付く。それで国史学ができました。さらに帝国としての日本が勢力を拡大する過程で、東洋史が必要になり、その講座が作られたということです。

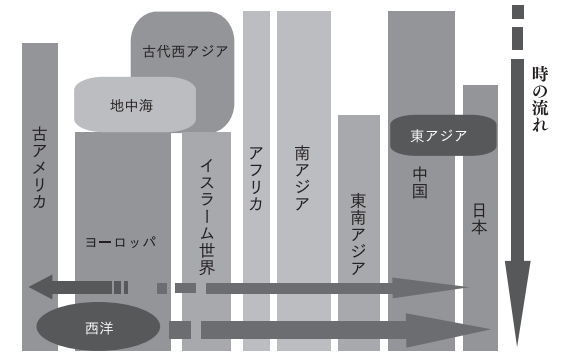
このように、近代歴史学は、決して「無用の学」や「虚学」ではありませんでした。時代や社会と密接にかかわり、その善悪は別にして、その時代と

「現代日本における一般的な世界史理解」の人々が世界各地に進出し、その結果、世界の構造化が進みます。それまでばらばらに複数存在していた文明・地域世界が一体になっていくのです。そして、近代と呼ばれる18世紀末から19世紀になると、「ヨーロッパ」、ないし「西洋」文明

の優位が決定的になり、その影響が世界全体を覆って行きます。この場合の影響とは、政治的、経済的、文化的、軍事的など様々です。そして、この西洋文明の主導下で世界全体が緊密に結びつき、一体の世界となったのが現代であるというものです。

この大筋の流れは、高等学校の世界史教科書に共通しています。教科書が準拠する学習指導要領の世界史理解が大体このようなものだからです。この世界史理解は、多くの人々が長い時間かけて手を加え、改良を重ねたものであり、私は現代世界においては相対的にすぐれたものだと評価しています。世界的に見た場合、自国史の他に世界史という科目を持ち、そこでこのような世界史が教えられている国はそれほど多くありません。例えば、ヨーロッパの多くの国々では、世界史は教えま

現代日本における一般的な世界史理解



せん。教えられるのは、自国とヨーロッパの歴史だけです。ヨーロッパの人々は、ヨーロッパ以外の地域の過去については、驚くほど貧弱な知識しか持っていません。また、中東では基本的に自国史だけを教えます。それらに比べると、それなりに中立的で世界全体の歴史を扱う日本の世界史には意味があると思います。

しかし、相対的にすぐれた世界史であっても、私はもはやこれを根本的に変えねばならないと思うのです。ここで現代日本における世界史理解を図に示してみよう。この図で重要なことは、それぞれの文明・地域世界が別々の歴史を持っていることが示されているという点です。それぞれがみんなばらばらです。それらを束ねたものが全体として世界史と理解されるのです。やや脱線しますが、そうでありな

がら、不思議なことに、高等学校の世界史の教科書では、人類の歴史は、最初は一体として描かれます。アフリカの東部で誕生した人類が世界中に散らばっていったと説明されているからです。それが、後に文明が成立すると、それぞれの文明がばらばらの歴史を持つようになります。最初は一体、中間でばらばらになって、最後はまた一体化する。人類の歴史はそのように理解されています。

さて、日本史、東洋史、西洋史と世界を三つの空間に分けて世界の歴史を理解しようとするのは、先ほど申し上げたように、20世紀前半の日本では一定の意味がありました。現在の世界史は、この三つの歴史を足し合わせて作られています。しかし、この歴史理解はもはや現状には合致しないのではないのでしょうか。当時は、世界を西洋と東洋に分けることが日本人にとって重要であり、それは当の西洋の世界認識とも合致していました。しかし、世界が一体化した現代において、世界を西洋と東洋に分けてその歴史を別々に描く必要があるのでしょうか。そもそも東洋とはどこのことなのか。東洋という枠組みで歴史を考えることには、もはや意味がありません。世界を三つに分けるのではなく、先の図のように

さらに多くの文明に分けて考えるとしても同じことです。互いの違いを強調する世界史の時代はもう終わったのではないかと思うのです。

ここでもう一度「ヨーロッパ」がすべての歴史理解の前提になっていることに注意を喚起しておきましょう。19世紀にヘーゲルやランケが世界史を構想したとき、その世界史はいま私たちが想起するヨーロッパ史のことでした。当時は、ヨーロッパ以外の地域は進歩していないと考えられ、およそ歴史があるとはみなされていなかったのです。時とともに進歩、発展してゆく社会だけが歴史を持つことができると信じられていました。その頃と比べれば、いまご説明した日本における世界史のように、世界にはいくつかの文明があった、少なくともある時期にはそれらが皆横並びだったと考えること自体が、ヨーロッパ中心主義を相対化することにはずいぶん貢献しているのは確かです。

しかし、強調しておきたいことは、それにもかかわらず、ヨーロッパの歴史が、依然として自分がヨーロッパの人間だと考えた人の信じる枠組みで書かれ、理解されているということです。「ヨーロッパ」という枠組みや歴史理解そのものに対して、非ヨーロ

パの人々が異議を申し立てそれが受け入れられたということはありません。ヨーロッパ中心主義は弱まったかもしれませんが、しかしヨーロッパ中心史観（「ヨーロッパ」と他を区別する歴史観）が払拭されたとは言えないと思います。

そもそも、「ヨーロッパ」とは何なのか。私たちは、この概念を無条件で認め、世界史の一部としてその特権的な歴史を描き続けてよいのでしょうか。ここで、「ヨーロッパ」史の虚構性に話題を移したいと思います。

近代ヨーロッパの歴史学者が、これが私たちの歴史だと言って描いたヨーロッパ史は、地理的な意味でのヨーロッパとは重ならない「概念の歴史」です。彼らが勝手に決めたこととはいえ、地理的には、ヨーロッパの範囲は明確です。ウラル山脈の西側、ボスボラス海峡の西北側がヨーロッパです。しかし、私たちが通常ヨーロッパの歴史として思い浮かべるのは、この広大な地域のうちのごく一部を占める国やそこで活躍した人たちの歴史をつなぎ合わせたものでしかありません。ある時期にはそれがギリシア人であり、別の時期にはそれがローマ人となり、あ

問題点

- ◎ 日本では、20世紀前半には一定の意味があった歴史認識。しかし、現状には合致しない。
- ◎ ヨーロッパ中心史観（「ヨーロッパ」と他を区別する歴史観）が払拭されていない。
- ◎ そもそも、「ヨーロッパ」とは何なのか。この概念を無条件で認め、世界史の一部としてその特権的な歴史を描いてよいのだろうか？→「ヨーロッパ」史の虚構性

る時期には、イタリア、ポルトガル、スペインの人たちが中心になり、さらにはオランダ人、フランス人、イギリス人が主役として登場するのです。

具体的に、スペイン・ポルトガルの場合を考えてみましょう。16世紀から17世紀には、イベリア半島の人たちが大西洋を越えてアメリカ大陸に進出します。彼らは喜望峰を越えてアジア海域にも出かけて行きます。これは、世界史上で「ヨーロッパの海外進出ないし海外発展」と呼ばれています。しかし、18世紀末から19世紀になりますと、スペインやポルトガルの影は「ヨーロッパ」史からほとんど消えてしまいます。この時期のヨーロッパの歴史は、イギリスの産業革命やフランス革命を中心に描かれ、当時のスペイン、ポルトガルがどのような状況にあったのかはほとんど問題になりません。第二次世界大戦が終わってからも長い間、スペイン、ポルトガルでは独

裁政権が続いており、他の国々とは政体がいぶん異なっています。スペイン、ポルトガルが常に中心にある「ヨーロッパ」史を描けば、いま私たちが当然だと思っているヨーロッパ史は相当書き換えられねばならないでしょう。ギリシアやイタリアの場合も、これと同じことが言えそうです。

16～17世紀の日本列島の人々は、ポルトガル人やスペイン人を南蛮人、イギリス人やオランダ人を紅毛人と呼んで両者を区別しています。当時、彼らは同じ「ヨーロッパ人」とはみなされなかったのです。それを同じだとみなして描いたのが、のちの「ヨーロッパ史」ではないでしょうか。

次にフランスとアルジェリアの関係を考えてみましょう。通常、アルジェリアはフランスとはまったく異なった別の世界に属していると考えられるのですが、しかし両者は本当に別世界にあると言えるのでしょうか。例えば、ゲルマン民族大移動の時には、ヴァンダルと呼ばれる人々がイベリア半島を經由してアルジェリアやチュニジアにやってきます。フェニキア人やカルタゴの人々の例を出すまでもなく、地中海の北と南は船ですぐ行き来できます。ブローデルが試みたように、地中海とその周辺を一つの地域とみなしてその

歴史を描くこともできるはずですが、しかし、「イスラーム世界」に属するとされるアルジェリアや北アフリカは、どうしてもヨーロッパ史からは排除されてしまうのです。

イスタンブルとウィーンの場合にも同じことが言えます。イスタンブルとウィーンは陸続きですし、ロンドンとローマの距離よりもはるかに近い。しかし、オスマン帝国の領土であったイスタンブルは「イスラーム世界」に属しているから、ヨーロッパの中にあるウィーンとは違う、あるいはイスタンブルの歴史は私たちの歴史ではないということになってしまいます。

このような例はいくつでも挙げることができそうです。これらのことから、「ヨーロッパ」の歴史が、相当恣意的に組み立てられていることがお分かりいただけるのではないかと思います。現代世界では、EUが組織・形成され、トルコをそのメンバーに加えようという動きが見られます。したがって、新たにヨーロッパの歴史を構想する際には、そこにトルコを加えて考えねばならないと主張する人々もいます。しかし、元来のヨーロッパ史は、とりわけ英仏独など北西ヨーロッパ地域の人たちが、その信じる世界観に基づいて、自と他を区別し、都合の良い過去の史

実をつまみ食い的に取り入れて大筋を作り出した歴史なのではないでしょうか。その意味では、これは虚構の歴史です。これを無条件で認めているところに、現代日本における世界史理解の限界があると思います。

私は現代の日本の歴史学が目指すべき最終目標を、次のように考えます。

それは、できるだけ多くの人々が受け入れることのできる「共生の世界史」を、日本語、英語で提示することです。

といっても、いきなりそこに到達するのは難しいので、当面の目標を定めたいと思います。ヨーロッパないし西洋とそれ以外を分けて考えることが、19世紀以来の私たちの根本的な世界観を形成していますが、まずこれを改めることを提案したいのです。それは「ヨーロッパ+アジア」ではなく、「ユーラシア」の実体化です。ここで告白しておかねばならないことは、私が依然として「西洋」で生み出された学問の手法を使おうとしているということです。近代歴史学の有用性の一つは、地域や民族概念の実体化にあり、「ユー

目標

◎最終目標◎

現代にふさわしい「共生の世界史」を、日本語、英語で提示し、それを多くの人々が受け入れること

◎当面の目標◎

18-19世紀のユーラシアを一つの空間とみて、その歴史を描く方法を考えること

・アジア史(東洋史)+ヨーロッパ史(西洋史)+日本史ではなく、一体としてのユーラシア史

・一部が「近代」、他は「前近代」に分断された歴史理解ではなく、全体が同じ時を共有するユーラシアの歴史

ラシア」を実体化させようとする私は、正にその有用性を使おうとしているからです。近代ヨーロッパが生み出した学問の枠内にとどまっていると批判されるでしょうが、私の意図は、近代ヨーロッパの生み出したものを逆手にとって、「ヨーロッパ」を相対化しようというところにあります。

18世紀から19世紀のユーラシア史を一体として理解し、叙述する方法を考案することは歴史学にとって大きな意味があると私は考えています。一体といっても、アジア史(東洋史)+ヨーロッパ史(西洋史)+日本史のように、それぞれがバラバラのものを足し算するという話ではありません。そもそも、私たちが了解しているヨーロッパ史自体が18、19世紀に作られたものです。それより前にはヨーロッパの歴史という考え方はないのです。

日本史という枠組みで考えると、例えば産業革命が日本のどこで起こったかということはあまり問題にはなりません。富岡製糸場という具体的な場所が挙げられても、それは日本の中にあるわけで、私たちは、通常、日本で産業革命が起こったと考えます。同様のことを、ユーラシアについても実現できないでしょうか。マンチェスターで産業革命が起こったとしても、それをユーラシアにおける産業革命と理解するのは、

ユーラシアを一体と考えることで、ある一部地域だけは近代に入っている他は前近代にとどまっているという分断された歴史理解ではなく、ユーラシア全体が同じ時を共有する歴史を書きたいのです。

これに対しては多くの反論があるでしょう。例えば、それはマルクス主義と同じではないか、マルクス主義史学は人類全体の歴史を書こうとしていたのではないかとお考えの方がいらっしゃるかもしれません。しかし、マルクス主義史学は、世界をヨーロッパと非ヨーロッパに分け、発展段階説によってヨーロッパだけが先に進んでいくと考えるわけですから、ユーラシアを一体としてはとらえていないのです。

あるいは、私たちが必要なのは、世

界史ではなく国民国家の歴史だと主張する人もいるでしょう。もちろん、19世紀から続いてきた実証主義的な方法によって細かい史実を積み上げて国民国家の歴史を示すことがなお必要な場合もあるでしょう、とりわけ、いま正に国家建設を進めているイラクやアフガニスタンの場合、必要なのはまず国民国家史かもしれません。それをやるとはいけないと私は考えていません。現実に国民国家が存在する以上、国民国家史があるのは当然です。しかし、それと同時に歴史家は共生の世界史を作っていくための努力も怠るべきではないと思うのです。新しい世界史構築の必要性を認識しているにもかかわらず、そのための努力を放棄して、どこかの地域史の専門家として澄ましているのは学問的怠慢なのではないでしょうか。

最後にもう一つ、いま私が申し上げたことは、ただ歴史学だけの問題ではなく、人文社会系の学問全体に関わっているのだということを強調しておきたいと思います。私たちが携わっている学問の多くは、19世紀から20世紀初めのヨーロッパで、当時の世界観を背景にして形成されました。経済学、政治学、社会学、人類学などがそうですし、例えば哲学の分野には西洋哲学

史があります。美術史には西洋美術史、建築史には西洋建築史という分野が存在しています。これらはすべてヨーロッパの歴史を前提として作られている学問です。ヨーロッパとは何かということを考え直すということは、これら諸学問そのものをすべて見直すことにつながるだろうと思います。

共生の歴史と移動と時間

小林 「共生の世界史」を書くための新しい方法はどのようなものになるのでしょうか。いわゆるヨーロッパではなく、一体化したユーラシアという見方をとること自体によって、単に対象の問題でなく方法が問われることになるはずですが。その歴史を描く方法はどういうものになるのでしょうか。

羽田 これからやろうとしているわけですから、まだやってみようと思っていることを言うしかありませんが、いま私が考えているのは、いわゆる文化交流です。過去を振り返ると、地球上を人、もの、情報が絶えず移動しています。しかし、それをヨーロッパのものが日本にやってきた。日本がヨーロッパ文化を取り入れたというふうにはとらえない。あらかじめ「ヨーロッパ文化」や「日本文化」があったとは考えないということでしょうか。例え

ば、19世紀のイギリスとスペインの間とイギリスと日本の間の交流を、同じ時期に起きた同じ種類の文化交流としてとらえなおしてみたい。そうすることによって「ヨーロッパ」という概念を相対化できるし、ひいては「アジア」と「ヨーロッパ」の区別を乗り越えることができるのではないかと考えます。

小林 移動が大きな問題になるわけですね。ものの移動であれ情報の移動であれ人の移動であれ、つまり移動という方法が歴史にとって重要である。従来の歴史観が、もし羽田さんが批判されたように、国民国家とか民族国家とか、いずれにせよ中心化する権力作用にリンクすることによって歴史学が自分たちのポジションを得ていたならば、その同一化の、あるいは権力的中心化に歴史学はいわば奉仕をしていたということになる。そこで、共有の過去を設定することによって、中心化があるいは同一化がより強まる方向に歴史学が動いてきたことに対していま新しい歴史の方法を考えるとすれば、それはその中心化に対して移動という方法でもって参加する。あるいは歴史学を中心に奉仕させるのとは違うものにして、歴史を書くということですね。例えば羽田さんは海域や港の研究を

なさっています。それは移動を歴史学に応用するための方法の一つだということはあるのですが。私が哲学者としていまの羽田さんのヴィジョンに対して疑問があるとすれば、羽田さんはもう一つ別の同一性を導入しているのではないか、ということなのです。それは権力的な同一化ではなくて、同時性、あるいは同じ時間に移動する時間そのものと言ってもいいと思います。いわゆる近代、前近代と言われているものが同じ時期にどういうふうに動いていたかを見るということになるとそこに何らかの同一性が入り込んでいるわけですね。

しかし私のこの哲学的な頭にとって、歴史というもののいちばんやっかいなのは、同時性、現在と言ってもいいのですが、現在性というものが挫折するところにこそ歴史はあるのではないかと考えてしまうからなのです。つまり歴史というのは、単線的な、リニアな時間があるなかで、ある現時の位置をとると、そこに全部同一の、同一的な歴史的な空間がそこに出現しているものではないのではないかと。例えば我々の文化というのがあるとするならば、それは実は異なった時間が、様々な時間が、いまここに現存しているからではないか。そしてそれが、我々の

現実ではないかと考えるのです。いまそこに一つの遺跡がある、ここに過去があるというように、つまり、我々の一つの現在と言えものが、実は現在だけではなくて無数の時に、異なった時に、何と云うべきでしょうか、ネットワークとか、その関係網みたいなものによってこの現在は出来上がっているのではないかと考えたいのです。それをある一つの現時、あるいは歴史的現在の同一性と一緒にして考えることはできるのだろうかということが疑問として残ります。

羽田 最初に小林さんがおっしゃったように、歴史を書く方法はいろいろあると思います。私は自分が提案しているものしかありえないと言っているわけではありません。様々な方法があってよいのです。いま小林さんがおっしゃったことを私は必ずしもよく理解できていないのですけれども、しかしそれでも歴史が書けるのであれば、書いてみればいいのではないのでしょうか。それはたぶん私が書こうとしているものと同じではないでしょう。だからとって、最初からそんなものはありえないとか、あるいはそういう考え方は歴史は書けないとは言えません。

小林 少し質問を変えてみると、羽田さんの新しい歴史を描く方法とは、

例えば 18、19 世紀のユーラシアを一つの空間として見て書く場合に、その空間はやはり時間のタグをつけた事実によって出来ているものでしょうか。するとその記述は、時間の単位が何であれ、何月何日どこそこにあった事実を膨大に集積したものを一つの空間の中に入れたものが、羽田さんの歴史ということになるのでしょうか。

羽田 膨大に集積したものを一つの空間の中でどう解釈するのかとお尋ねになられたと思うのですが、これはやってみないとわかりません。とにかく、ユーラシア史、ひいては世界史の文脈にそれぞれの事象を置いてみるということです。

小林 事実に関しては、懐疑の目は抜けない、と。

羽田 史実は、時間と空間の制限を受けたある立場に立つ歴史家によって生み出されるものでしかないと考えています。18、19 世紀の世界史を書くときにどのような史実をそこに入れ込むか。それは、その歴史が書かれる時と場所によって、また歴史家の置かれた立場によって異なってくると思います。そういう点では、史実を疑っている、というか、史実が事実だということを私は最初から相対化しているつもりですけれども。

小林 先ほど私が言った中心化する歴史という概念は、括弧つきの東洋的に言えば、中島さんが専門の「統」という概念、つまり「正統」の概念です。統という、正しくつながっていくという概念につながっている。すると、これに対して、もし移動という方法で別の歴史を展望しようとする、中心化する統の歴史に対して、別の移動の歴史、つまり移動する空間の歴史を考えることになると思うのですが、中島さん、いかがでしょうか。

「世界史の哲学」という問題

中島 羽田さんがおっしゃるように、移動に注目したうえでそれを時間軸上に展開していくことは、私には非常に面白いアイデアだと思いました。ただ、具体的に歴史を書いていく段になると、小林さんがおっしゃったように、全部を書くことはできないわけですから、何かを選ぶしかありません。何らかの選択が働いて、その選択の力の中でしか歴史は書けないわけです。しかし、ある角度から書かれた歴史の中に、様々な時が入り込んでくるとすれば、結果的にはお二人がイメージしている歴史は同じものになるのではないのでしょうか。

ここで中国の歴史学を考えてみま

すと、前近代において中国は非常に強力な歴史観を持っていました。したがって、歴史学は伝統を背負った学問であるだけでなく、その中には、世界を中心化する力をも有していたわけです。その典型が、先ほど言及のあった「統」という概念、すなわち正統の「統」という概念です。では、この概念のもとに世界を中心化してきた中国は、歴史学においていかなる歴史を書いてきたかという、それは「世界史」を書いてきたわけです。世界史という言葉を使わないとすれば、「宇宙の歴史」といってもよいかもしれません。いずれにせよ、中国では、歴史において、すべてを書こうとしてきたわけです。その後、近代になりますと、今度は国民国家としての「中国の歴史」を書かなければならなくなります。世界史から国民史へと転換していったわけですが、これは想像以上に大きな変化だっただろうと思います。

しかし、逆から考えますと、前近代において歴史を書くということは、世界史を書くということにほかならなかったわけですから、国民国家の歴史を書くことの方が非常に特殊な現象なのかもしれません。それは、18世紀、19世紀における、ある一過的な現象ではないかとさえ私には思われてくる

のです。では、ここでもう一度、羽田さんがおっしゃるように、世界史を書こうという場合、それは、前近代的な正統という概念を用いて中心化されている世界史をまた繰り返すことになるのでしょうか。もちろんそのようなことではないはずで、それとは別の歴史を書くことに当然なることでしょう。では前近代的な世界史と、いまこれから発明されようとしている世界史が、決定的に異なるのは何においてなのでしょう。それについてもう少し私はつきつめて伺いたいと思います。というのも、中国の前近代の歴史を考えていくと、時間軸によって世界を切り取っていくわけです。その際、様々な歴史に関するジャンルを立て、その中に出来事を配列していきます。これはある意味で完成した世界像を提示しています。そのような前近代の世界史と来るべき世界史が、方法論として何が決定的に違うのでしょうか。これが、私の伺ってみたい第一のポイントです。

もう一つ、世界史と耳にしますと、どうしても戦前の「世界史の哲学」を思い浮かべざるをえません。これは日本近代の哲学と歴史学の交叉点にある問題です。世界史の哲学を構想することで、国民国家的な歴史を乗り越えて、新たな世界史を作ろうとします。しか

し、それは日本を中心とした「新秩序」としての世界史で、国民国家とは違った意味で、日本が特権的な場所にされていきます。

最初に羽田さんが、日本には世界の各地の歴史を研究する歴史学者がいるとおっしゃいました。それは歴史学においては日本の優位性なのだろうと思います。しかし、考えてみますとその態勢は、戦前の日本からあったものです。戦前の日本において、もちろん羽田さんが目指している世界史とはずいぶん違うものですが、世界史に対する学問的な強い傾きがありました。それは、「世界」という概念が新しいものであり、そこに語るべき何かであったためではないでしょうか。その上で、「世界」に、新たな秩序や新たな原理を見いだすのが、世界史の役割だったのだと思います。「世界史の哲学」も、このような世界の歴史の研究という背景がなければ成立しなかったのかもしれない。こう考えてきますと、来るべき世界史を構想していくには、「世界史の哲学」という近代日本が抱えてしまった一つの問いにどこかでケリをつけなければならないだろうと思います。

たまたまここに高山岩男『世界史の哲学』（1942年）を持って来ました。

最初に羽田さんがご紹介された日本における世界史のイメージを、高山やその周りの人々は非常によくわかっていました。その上で、前近代的な世界一元論的な世界史ではなく、ある新しい多元性に基いた世界史を作らなきゃいけないと唱えます。その多元性とは何かというと、前近代にそれぞれ別々に走っていた複数の文明を束ねるのではなく、それらを貫くような多元性を見なければいけないということを言っています。これが羽田さんのビジョンと決定的に違うのは、例えば高山ですと、ここで日本の役割をどんどん競り上げて行って、日本こそが多元性を実現する当の場所だという点です。日本を通じてはじめて、東洋や東洋史が可能になり、さらには世界や世界史が成立しうるというわけです。こういった態度を羽田さんがお持ちになっているわけではもちろんありません。それを承知の上で、方法論的なレベルで、こうしたタイプの世界史の叙述とどうやって区別して行けばよいのか。これを私は是非伺ってみたいと思うのです。

もう一つここに、三木清の「現代日本における世界史の意義」という1938年に書かれた短い論文ももってきました。この中で三木も高山と同じようなことを述べています。日本の役

割、しかも「歴史の理性」という大きな言葉を使って、歴史の理性から見た日本の役割と世界史について論じています。では、高山と同じかというところ、三木の場合は、少し違うところがあるようにも思われます。というのも、これは後で橋本さんの議論につながってくると思うのですが、三木は科学の問題を入れているからです。単に世界史を、文化的な接触が激しくなり支配が生じるという仕方でも構想するだけではなく、そもそも科学というものこそが、そうした世界史を可能にしているのではないかと考えているのです。つまり、世界史という概念を可能にしているものは別にあり、それは科学ではないのか、というわけです。これを先ほど述べた二つの世界史に引きつけてみますと、前近代に構想されていた世界史と、18世紀、19世紀の国民国家的な歴史の後にいま構想されるべき世界史の間に違いがあるとすれば、後者はこうした科学の問題をどう処理すべきなのかを考えるという点ではないかと思うのです。科学はある種の強力な普遍性を持ち込んできます。一体、そうした普遍性を歴史学は、さらには来るべき世界史はどのように相手にするのでしょうか。これがお伺いしたい、最後の問いです。

そして、これらの問いはまさに哲学の問題であるとも思います。歴史学だけでなく哲学も応答しなければならないものなのです。羽田さんが日本の大学における歴史学の誕生について冒頭でおっしゃいましたが、哲学はといいますと、少なくとも東京大学においてはこれまで西洋哲学がイメージされてきました。東洋哲学や日本哲学はその脇に置かれてきたのです。こうした配置の中で世界哲学を構想したとしますと、それが、東洋+西洋+日本というように単純に足し算をしたようなものではないことはすぐにわかります。非対称性がこの三つの間にはあるからです。では、それを乗り越えて、世界哲学において何を、どう書くのか。これは哲学にとってきわめて重要な問題だろうと思います。しかもそれは歴史と無縁ではない。近代の日本哲学にしても中国哲学にしても必ず哲学史、つまり、中国哲学史であるとか日本哲学史といったものを書くことを離れて日本哲学とか中国哲学を構想できなかった。歴史なしで非西洋の哲学を自ら構想できなかったという、いかんともしがたい現実があるわけですね。ですから、いま申し上げたいいくつかの問いは、哲学にしても歴史学にしてもまったく同じ問題となるのだと思います。



小林康夫、中島隆博、橋本毅彦、羽田正

羽田 まず前近代の中国における歴史記述と近代歴史学の相違についてですが、これは中国だけでなく、ヘロドトスに代表されるギリシアの歴史家たちとも共通する問いだと思います。近代歴史学には史資料の扱い方に厳密な手続きがあります。史料批判といいます、これと論理的で緻密な論証が合わさって「史実」が「事実」となりうるのです。この点に大きな違いがあるのではないのでしょうか。中国では、例えば『二十四史』のような公的な歴史書の場合も、基本的には書く人は自分が知っていることを書くのです、その人が知っていることが本当に正しいかどうかを証明する手立ては必ずしも確立していない。しかし近代歴史学の場合、ある人が何かを論じようとする、それを読む人たちがその論の当否

を客観的に判断できるだけの材料、これを典拠といいます、これを示さねばなりません。つまり、世界史を書くという点では違いはないけれども、それを記述する方法に違いがあるのだと私は考えています。

次に、世界史の哲学についてです。最初の問題提起ではこのことを強調しなかったのですが、いま私に言えることは、例えば日本、ヨーロッパ、あるいはフランスでもどこでもよろしいのですが、これらの国を最初から前提にはしないということです。中島さんがご説明下さったように、戦前の世界史の哲学では、初めから「日本」が前提になって議論がなされています。だから、日本史は不可欠であり、しかもその日本史は世界史の中の重要な要素となります。しかし、新しい世界史では、

日本やフランスやアメリカといった国が主語になることはないはず。主語は、人類だと私は思います。私がここでとりあえず「ユーラシア史」としているのは、アメリカやオセアニアが重要ではないということではなく、ヨーロッパとアジアを区分することが最大の問題なのであり、ここをどう乗り越えるかがもっとも重要だと思うからです。いずれにしても新しい世界史においては、国民国家を前提にしない歴史の書き方、そしてどこかに中心を置かない書き方を工夫しなければならないでしょう。

それから科学の問題です。19世紀初めのいわゆる「ヨーロッパ」と、それ以外の地域とを比べてみた場合、政治、経済、社会の状況は表面的にはそれほど変わらないと思います。しかし、科学については、明らかに様相が異なっています。いわゆる「ヨーロッパ」では、科学が社会のあらゆる側面で非常に大きな意味をもつようになってきています。三木清の論文を私は読んでいませんが、科学ゆえに近代において世界史の構想が生まれたという考え方は興味深いと思います。いずれにせよ、科学と近代に深い関係があることは間違いありません。

また科学の普遍性は、UTCPで私が

担当しているプログラムである「世俗化」の問題とも関わってきます。キリスト教世界では、ある時期までは聖書に書かれた過去の出来事そのまま歴史でした。世界の歴史はアダムとイヴに始まるのです。17世紀くらいまでは、私たちが現在知っている世界史とはまったく異なった歴史認識を、キリスト教徒の大半が持っていました。キリスト教世界における歴史認識の根本的な転換、すなわちキリスト教的普遍史から科学的、世俗的な歴史叙述への転換が生じるのが、ちょうど18世紀の末から19世紀の時期なのです。この転換に科学が大きな役割を果たしたことは明らかです。

小林 科学はある意味では事実というコンセプトと非常にリンクしている。普遍性と事実と科学とテクノロジーと、すべての実証的な操作可能性の総体のようなものが出てきていて、歴史学も、それと無関係では決してない。科学的な世界認識、まさに事実に基づいた世界認識の発生とその歴史学そのものの発生がリンクしている。また同時にこれは、科学がテクノロジーの問題でもある。ここで橋本さんに、世界史にとっての科学あるいはテクノロジーについてお話しただければと思います。

科学と世界史

橋本 科学というものも確かにヨーロッパの思想、ヨーロッパの文化、非常に強力な核になっています。ではなぜ科学というのがヨーロッパで生まれたのだろうかということは、科学史の非常に大きなテーマになってきました。

まず、そもそも科学とは何だということ。自然を統一的に説明する、あるいは合理的に説明するというのは様々な文明にあり、中国でもあったわけ。いわゆる近代科学と呼ばれるもの、コペルニクスの地動説から始まって、ニュートンの力学で完成するような物理学として、それに加わる化学、生物学など、ヨーロッパで生み出された近代科学というものは非常に強力な論証性を持っているということがあるかと思います。これはずっとたどっていくと、ギリシアの非常に強力な論証の方法というのが由来になっているわけ。ただ最近はいろいろこれに関してももう少しアラビアの役割を強調するべきだという見方も出てきています。もともとギリシアからヨーロッパに来るわけですが、アラビアを経由してヨーロッパに入っている。アラビアを経由する際に、さらにいろん

なつづくわえがあって、そこでまた発展をして、コペルニクスに学ばれて、地動説になった。したがって、アラビアの役割も非常に重要であるということも言われております。

それともう一つは、「科学革命」という言い方がよくなされるわけです。これは地動説に始まりニュートンによって完成される宇宙観の革命があった。それと機械論的自然観。自然というのは粒子で並んでいて、原子分子で成り立っていて、それが動く。それが組み合わせられてその現象が起こる。これはそれ以前の考え方、あるいはヨーロッパ以外の考え方とは全然違う考え方で、それが我々の視点を考えるベースになった。この二つが結びついてニュートン力学、近代科学ということになってきたわけです。ところが、この機械論的自然観というのは、少し前に遡ると、どうもこれがすぐに16世紀、17世紀にすぐにできてきたわけではなくて、なだらかに中世の後期からだんだんと成立していたのではないかと、例えば錬金術の伝統を再評価するということが言われたりしております。このように近代科学再考、科学革命再考という動きがあるにしても基本的には、近代科学という非常に強力なものが生まれ、ヨーロッパのパワーの一つの核になっ

ているというのは了解され続けていると思います。

先ほど小林さんが別の時間というふうなことをおっしゃいましたけれども、私の理解したのは、同時性について、ヨーロッパの時間がユーラシアの他のところでも成り立つのか、他のところには別の時間があるのではないか。羽田さんの批判でも、時間が違うところであれば違う歴史を書くというのが自然ではないか、そういう意味での別の時間というものがあるのかもしれない。

例えばそれと関連して、中国でイエズス会士が17世紀、18世紀に来た時のことを考えてみましょう。ヨーロッパから中国に持ってきたのは地動説、もっともニュートン力学のものではなくて少し半近代の天文学ですけれども、しかしよく天体を予測することができました。中国では天体の予測には、国家的な事業として古代から非常に大事な占星術の伝統があります。その点ではヨーロッパより16世紀までは優れていたのですね。イエズス会士がやってきてそれまでの天文学との競争があり、結局イエズス会士の天文学、天文予測の方が勝ってしまう。天体现象に関してはイエズス会が宮廷のおかかえの学者ということになるわけです。こ

れは天体における非常に重要な役割、つまり暦を作るということで、大きな影響を持ってくることになります。時間といういろんな広がりがありますけれども、暦はその中の大事な要素です。暦は、非常に大事な「統」ということでもあったはずですが。その点でも時間を変えるようなことが、情報、もの、人を通して起こってくるということがあったと思うのです。

そして、技術の歴史についてです。そもそも帝国主義列強の時代から、ヨーロッパ中心主義が、あるいは今世紀になりアメリカが世界を覇権していくそのパワーの源はどういう技術だったのでしょうか。彼らの持った技術が、それ以外の人々が持つものとは違うがゆえに征服し支配したということなのでしょう。例えば、チポラという歴史家が『大砲と帆船』という著書を書いています。タイトル通り大砲と帆船が鍵になったというわけです。ヘッドリックという歴史家は帝国主義の道具として戦闘の道具である銃砲だけでなく、マラリアの予防薬であるキニーネや、蒸気船、電信、鉄道というように植民地を征服した後の統治において重要な役割を果たす技術が、ヨーロッパの支配、世界支配を支えたことを指摘しています。その時代、ヨーロッパの

産業革命に伴う蒸気機関の発明、機械式の量産の方式、鉄の生産と使用が欧米では急速に進んでいました。そして19世紀後半になりますと、それに付け加えて科学と結びついた通信と交通の手段、資材と材料、管理法などが登場してきます。

ただ、ここで指摘しておきたいのは、科学がやはりコアとしてありますけれども、科学が技術としてパワーを持つようになってくるのはやはり18世紀、19世紀くらいになってからなのです。18世紀くらいまでは産業革命にしても、科学者のアドバイスを受けてそれで新しい技術が出てくるというよりは、技術者、発明家たちがどんどん新しい技術を作っていたということの意味していたのです。

最後に歴史を書くということに関して、技術史の書き方について述べておきます。最近の技術史の傾向として、ある技術が出てくるプロセス、つまりどういうふうに進んでいったのか、革新されたのか、というよりも、それがどういうふうに使われたのか、それが成り立つ場というのはどういうふうなものだったのか、つまりコンテキストが非常に強調されるような傾向があります。例えば、或る物をつくる技術のシステムが、ある場所から他の場所に移

転をするといった場合に、どういうふうな制度、社会、文化的なコンテキストがそれを支えることになったのか。あるいはそれをうまく消化できない、なぜ摩擦が起こったのか。こういうことが非常によく話題になっています。技術史の研究対象というのは、ヨーロッパだけではなくても、いろんな場面でのコンテキストと技術との関係ということが問題になっているのです。例えば、発明、それから革新があり、それが実用化されていく、あるいは利用されていくプロセスに注目する場合があります。あるいは開発ということに注目すれば、開発のコストということを考え、中国でのロケットやインドのソフトウェアの開発のように、非常に低価格でしかも多人数で開発を進めることができるので、欧米から離れたところでむしろ最新の技術ができあがっていくということは考えやすいことかと思えます。

21世紀の技術の問題ということ言えば、先ほど述べたようにそもそも科学とは自然を統一的に説明する、あるいは合理的に説明する、つまり、自然をコントロールしていくということが近代技術、あるいは科学が出てくる時に一つテーマとしてあったわけですから、そのこと自体がいまま

に非常に大きな問題を引き起こしています。そこで歴史を遡って、例えば前近代社会ではどのような技術の使われ方があったかを考えてみる、例えば日本では江戸時代での技術のあり方などにも関心が向かっていると考えるでしょう。

普遍性の問題

羽田 お話を伺って一つだけ気になったのは、ギリシアからヨーロッパへの橋渡しをするアラビアの役割という表現です。これはヨーロッパの歴史がすでにそこにあることを前提にした考え方だと思います。「私たちとは異なるアラビアから、保存されていた古代ギリシアの知識を受け取った」と考えるわけですが、なぜそこを分けて考えねばならないのでしょうか。ユーラシア西方と一括して捉えてみれば、そこでは知識や技術が絶えずにずっと伝わっているのであって、一旦なくなったものが復活したと考える必要はないのではないですか。科学史の分野でも、なおヨーロッパ中心史観が健在であるように感じます。

小林 我々がヨーロッパという地域を考える際に、西洋とヨーロッパを分け、ヨーロッパを地域概念として使い、西洋を文化概念のようにして使うと仮

定すると、我々が普通に考える西洋的なものは、ヨーロッパという地域的なものの中のいろんなところを巡っているということがわかる。いまのお話ですと、アフリカ北海岸全部含めて、全部ヨーロッパになりますね。ギリシアからイタリアに行って、スペインに行って、それからアラビアに入っただけでなくなった。ある意味では国も文化も全然違うかもしれないところを様々なものが巡りながら普遍化が起き、科学が目覚めていく。

美術史を見れば、イタリアだけで西洋美術史を書くことは絶対できないわけですね。西洋美術史なるものは、イタリア美術史ではなく、同時にイタリア美術とドイツ美術とフランス美術とスペイン美術を寄せ集めてもなく、そのヨーロッパという地域の中で、様々な中心を移動、ぐるぐるぐるぐる回りながら、一つの流れが、つまり決して言語にも固有のカルチャーにも還元できない何か備わっていくように見えてくるわけです。私の関心は、そうした「普遍性の旅」のようなものが考えられないかということなのです。

普遍性そのものがローカルなカルチャーを全部越えていけば、そういう意味では日本も西洋ですよ、極端に言えば、日本はまさに西洋であり、地域

概念ではないならアメリカも当然西洋です。ぐるぐるとある種の普遍的なものが、最後には核兵器まで造りながら、科学と言ってもいいし、あるいは歴史学と言ってもいいような、そういうものがぐるぐるとワールドワイドに回っているというように考えています。その主体は何かといえば、それはもはや国民国家という主体でもなく、民族という主体でもなくて、ある種のコンセプトとか、ある種のシステムとか、ある種のテクノロジーかもしれないし、そういうものが次から次へと受け継がれていくということだと思えるのです。

本当はこの主体は何かと考えたら人類であるとしか言いようがないはずなのに、しかしその人類としか言いようのない主体ですが、実は、人類は主体には決してなれない。人類が主体だったことは一度もない。日本人というのが主体になれるかもしれないし、日本という国家が主体になれるかもしれませんが、人類が主体になったことは一度もないのです。主体という意識を持つことができないにもかかわらず、あたかも人類というのが主体であるかのように、そういう普遍的なシステムが次々と、あらゆるローカルなカルチャーをオーダーしながら渦巻状になっている。こういうふうに見えてくる

のです。すると、ヨーロッパ、つまり西洋そのものはもはやヨーロッパ中心主義ではない。ヨーロッパと西洋をそういう意味で分けたいのです。

最初に言ったように私はどちらかというと西洋というコンテキストで語るのですが、これはヨーロッパというコンテキストではありません。フランスは日本と同じように西洋の中の田舎であり、ドイツも日本とまったく同じ、あるいはペルーと同じように世界の田舎にすぎないが、それらを次々とまわりながら行く何かがある。それがいま我々全人類を、そして地球全体を危機に陥らせかねないことになったのが、いまの歴史学の問題だと考えられるのです。

羽田 概ね賛成ですが、あるものがぐるぐる回ると言えば、それはやっぱり中心がどこにあるという話になってしまうのではないですか。

一つ例をお話しします。1860年代に長崎にやってきたオランダのボードインという医者がいます。この人は日本に最新の西洋式医学を伝えたということになっています。彼には弟子ができ、すぐに西洋医学を用いた効果的な治療が始まります。しかし、ボードイン自身が最先端の医学を学んだのは、彼が日本に来る1年か2年くらい前のことにすぎません。したがって、彼が

日本にきた時点では、ヨーロッパでも、彼と同じだけの知識と技術を持っている人はほとんどいません。ヨーロッパのどこでも最新の治療法が用いられていたわけでは決してないのです。そういう意味では、「近代」は世界同時多発的といってもいいようなものなのです。

大学という制度の場合も同様です。ドイツで「国立大学」ができるのは19世紀初めの早い時期ですが、フランスではフランス革命以降大学がほとんど機能しておらず、普仏戦争に負けた後、本格的に国立大学を作り始めます。イギリスのオックスフォードとケンブリッジも、古くから神学校としては存在していましたが、近代の大学としての姿を整えるのは20世紀になってからのことです。日本が大学制度を採用する時期とほとんど変わりません。そう考えると中心がぐるぐる回るという考え方はどうでしょうか。これは、ある一つの新しいアイデアを誰が採用するかという話ではないでしょうか。ヨーロッパの人々が常にそれを採用するわけではないし、現代のように日本人が新しいアイデアを出すこともある。「中心」という考え方は、あまり有効だとは思えません。

小林 中心が移動するというか、ヨーロッパの中にすでに移動はあって、

移動しながらしかもその全体が普遍性に向かっている動きになっていることに西洋というものがあるのではないのでしょうか。つまり普遍性の探究というものを、地域概念と切り離れた意味で、西洋というふうと呼べると思うのです。

例えば先ほど橋本さんが例に出されたキニーネで植民地を支配するということがある。キニーネ、あるいはそういうシステムは非常に物理的なものですけれども、そこではしかし、ものがただ移動したというだけではなくて、それが同時に、つまりキニーネという物質の薬剤の移動がその支配を可能にするわけですね。ただし、そこで普遍性探究のバトンがタッチされたということにはならない。それは単純に支配の道具になるだけです。その意味で私の言うところの普遍的なシステムが、単純に普遍性の流れを生み出すわけではなくて、それがまさに支配の道具になっていく。それは非常に重要だと思います。移動といっても単純な移動ではなくて、移動は同時に征服であり、支配であるという構造からはどうしても抜けられない。つまり権力という中心化の動きは移動だけではきつと完全には解体することができない。結局それはより強い中心化につながる可能性があるのではないか。

世界史における主体とは

中島 ちょっと付け加えさせていただと、それこそ中心が移動するというのは日本の東洋史学の典型的な学説でもあったわけですね。内藤湖南などは、いまや中国から日本に中心がやってきた、だから日本を中心とする東洋史というものが書かれるべきだと言っていました。そして高山もまた同じように、ヘーゲルを利用しながら、世界の文明の中心が移動していく世界史観を出していきます。そうしますと、中心が移動すること、そしてそれをフォローし、トレースして世界史だということは、戦前の日本においてもやられたことだとも考えられるわけです。しかし、羽田さんがお考えになっている移動ということ、そしてその上での世界史は、そういう世界史の哲学に収斂していったものとは決定的にどこかで違っているはずですね。そうでなければ具合が悪いという気がいたします。

そこで、どこで決定的に違いがでくるだろうかと考えた時に、科学としての歴史学というものを前提になさっていたと思いますが、科学の持っているある種の普遍性と歴史学の間に、何か方法論的な媒介が必要なのではないか、と思うのです。それを言っておか

ないと、さっき小林さんがおっしゃった、例えばシステムとしての（あるいはそれが人類と呼ばれるかもしれませんね）主体が浮かび上がってきて、そういったシステムの主体の歴史で終わってしまいかねません。そうなる、それは実は世界史の哲学をどっかで偽装したものにすぎないという批判が常に可能だと思うのです。例えば三木清にしたって、システムとしての主体、主体にならない主体というものを、「歴史の理性」と名づけてみたり、あるいは「一般的なもの」と名づけていたりしていたわけですよ。でもそうではない仕方で、いま羽田さんのお考えになっている世界史の主体を考えなければならないのだろーうと思います。それは、その世界史を書く主体、一体誰が書くのか、誰がその歴史を語るのか、ということと不可分だと思います。このことについてもう少しお話しただけではないでしょうか。

羽田 私は科学としての歴史学に依拠しているということはあまり意識していません。近代歴史学が科学の一部であるとすれば、確かにそうなるのでしょうか……。先ほど私はヨーロッパ近代社会における科学の役割と言いましたが、これは技術と言った方が正確かもしれません。

19世紀になった時点で、突然と言ってもよいほどに、ユーラシア西方の人々が持っている技術の力が上がったのです。これは一時的な現象ですが、それにしても、一部の人たちだけが有利な技術を保有し、技術の優位性が経済や軍事の優位性と結びついたために、彼らが世界の多くの地域を支配することが可能になりました。その優位性と「ヨーロッパ」という概念があいまって、自と他を区別するヨーロッパ史が生まれたというわけです。

歴史を書く主体という話ですが、私は「人類」でよいのではないかと考えています。小林さんはいままでは「人類」は決して主体になりえなかったとおっしゃいましたが、実はそうでもないと思います。人類がアフリカの東部で誕生し、それが世界中に散らばって、最終的に今から1万3000年ぐらい前までには世界中に住み着くようになったというところまでは人類の歴史として語られるのです。文明が成立してからは人類の歴史ではなくなったというのが現状における歴史理解ですが、最後まで人類の歴史という枠組みのまま書き続けるべきではないかと思えます。

小林 私も「Subject」という場合に、中島さんがおっしゃったように、誰が書くのかという主体の問題と、主語が

何かという問題と両方あると思う。戦前の世界史の哲学に見られるように主体という概念の罨にどうやったら陥らないですむか、どのように方法論的に防圧できるかということだと思います。

その答えの一つをいま羽田さんがおっしゃられたと思います。つまり、例えば人類の歴史を書くときに、遺伝子分析を取り入れて、世界中の人々の遺伝子追跡を行い、誰がどういうふうに、遺伝子がどう移動したのかという歴史を書いたとします。これは歴史ですよ。確かにこれは歴史ではあるが、しかしどこにも主体的な、近代的な主体の意思がないわけです。単純にデータに基づく人類史なら既に書かれてもいるわけですから、アフリカから、あるいはシベリアからこう渡ってほしい何百年ぐらには南半球のここに到達しました、と。しかし、こうしたものと同じ方法をそのまま続けて人類史を書けるのかどうか。極端に言えばそういうことですね。

ところで歴史的な資料というものは誰かが書いたものですよ。そこには必ず書く主体という意味で権力的な主体が生じているはず。しかし、移動と羽田さんが言うときに、それが一切なく、つまりどこにも人間的主体がまったく存在しないような形で書くこ

とはできるでしょうか。私が言うのは極限的な状態ですが、そういう方向に行くのか行かないのか、その決意をいま歴史家に求めているのです。

羽田 遺伝子追跡の歴史は、理科系の人たちがいま大変熱心で、たくさんの新事実が明らかになっています（例えば以下を参照。ステイーヴン・オッペンハイマー著、仲村明子訳『人類の足跡10万年全史』草思社、2007年）。そういう歴史の書き方もあるでしょう。それによって、地球上の人類はみなそれほど変わらないという意識を私たちが持つことができるかもしれません。私の場合は、いまのところそこまでは自分でできるとっておらず、既存の歴史学の方法論を用いてどれだけのことができるかをもう少し検証してみたいと考えています。既存の歴史学の方法に様々な欠点があることは十分承知の上で、なおかつその方法に賭けてみたいのです。

誰が書くかという主体の問題は当然出てきますが、これは世界市民である自分が書くということです。

小林 その場合に、理想的な状態で、ヴァーチャルに羽田さんが書いたとして主語はどういうものになりますか。私が聞きたいことはそこですね。書かれた歴史の主語は何なのか。

羽田 人々と私は書きます。

小林 その人々という概念は要するにPeopleでしょうか。そのPeopleは個人には還元できないものでしょうか。あるときには東京大学教授であり、あるいは羽田という個人で歴史を書くにしても、その主体のステータスの問題が出てきます。しかし極端に言うとPeopleというものはどこにもいないわけですよね。

羽田 Human Beings という言い方でもよいかと思えます。

歴史に対する選択と決意

橋本 ちょっとここで口を挟ましてもらいます。キニーネが発見されたのは南米です。インディオの人たちがキナの木をすでに使っていた。それをイエズス会士が見つけてヨーロッパに持って帰ってきてキニーネというものにした。そしてそのキニーネを使って今度はアフリカを征服する。マラリア対策でキニーネが作られて非常に功を奏したということになるわけですが、アフリカ征服というストーリーで主語となるのは、インディオでもイエズス会士でもなくて、アフリカを征服したいという非常に強い意図を持っていたヨーロッパ人が主語になってしまう。そのように歴史をストーリーで書く

きは、明確な主語や意図があって、それによって動いていくというふうにかざるをえないのではないか。

小林 キニーネをアフリカ征服に使うように考えた天才的な悪い奴は誰だという人間的な主語でストーリーを書くのか、ヨーロッパの People がそうしたという枠組みで示すのか、あるいはキニーネという補助技術が移動するシステムそのものを記述するのか。しかし、いずれにせ最後はやっぱりそれを書く主語の問題になるわけですね。歴史を書くことを考えると、最終的に問われるのはそれだと思います。

中島 羽田さんは先ほどランケの話をなさいましたね。三木もランケを引用してこう言っています。「世界史とはあらゆる民族および時代の出来事を、それらが相互に影響しつつ、前後して（また同時に）現はれ、相共に一つの生きた全体を形作る限りにおいて、包括するものである」（三木清「現代日本に於ける世界史の意義」、『三木清全集』第14巻、岩波書店、1967年、147頁）。もちろんランケはそう言いながらもヨーロッパ中心主義者にすぎません。

羽田 世界史と民族という語を、彼の場合はヨーロッパに限って使っているのです。

中島 しかし、これをもしランケではない人間の言葉として受けとったら、羽田さんが構想されている世界史と重なってくるところもあるように思われます。私が先ほどから伺っているのも、そこにあるほんのわずかな違いについてです。私は、世界史の哲学という議論は、本当に重要なものだと思っています。結果的にはある方向に行き間違ってしまったと思っているのですが、しかしいま世界史を考えると、それとほとんど同じことを考えざるを得ないと思っています。でもその「ほとんど」というところ、そのわずかな違いを我々が語らない限りは、やはりその罫にどうしてももう一回陥ってしまうだろう。こういう嫌な予感が常にあります。そして、おそらくその「ほとんど」というところに関わってくるものが、いま議論していた「Subject」の問題、あるいは「Agent」の問題だと思っています。

羽田さんがユーラシアの歴史を書いていきましたと言ったとき、一方では、なるほどそうだと得心するのですが、他方では、それは羽田さんが批判的に言及なさったヨーロッパの歴史を、つまりヨーロッパの歴史家が書くヨーロッパの歴史を、ひょっとしたら拡大しただけにすぎないじゃないか、とい

う議論も簡単にできてしまうようにも思うのです。しかし、そうであってはならないわけです。そのようなものではない世界史、ユーラシア史というものがきつと書かれるはずですが、その場合、一体何を書くのかということと、誰が書くのかということが密接にリンクしてくると思うのです。「誰が」は、「何を」を選択した瞬間に決まってくる。あるいは逆かもしれませんが、いずれにせよ、「何を」という歴史対象の具体性と、「誰が」という歴史叙述の主体はやはりつながっている。この選択を私たちはどう考えればよいのでしょうか。先ほど述べました、ほんのわずかな「ほとんど」という違いにおいて、どのような選択をするかの決意もまた問われていると思います。

橋本 近代科学を考えると、アラビアからヨーロッパに来てからのキリスト教との影響関係は大きなポイントになっています。今回はあんまり議論が出てきませんでしたけども、言ってみればキリスト教の文化圏、あるいはイスラーム教の文化圏といったように、こうした文化圏の切り取り方そのものも非常に大きなポイントだと思います。

それから、16世紀、17世紀の人たちが考えていた自然支配と、我々がい

ま目にする自然支配とはやはり随分違う。あの当時はキリスト教が強くて、原罪で人間は墮落してきたが自然を科学的に研究することを通して理想状態に戻す、そういうふうなことを考えていた人が多かったと思う。そうした自然の支配というか制御というものと、いまの環境破壊や核兵器で我々がイメージしている自然支配は随分違っている。どこかで時代と共に変質していったと思うので、そのあたりにも配慮する必要があります。

羽田 自然については、こういう考え方があっていいのではないのでしょうか。私は、ソフトな意味でとハードな意味での世界史があると思うのです。新しい世界史をハードに書くとしたら、自然と人間を一体にして、「Big History」というふうに英語では言いますが、地球の歴史のなかに人間を置き歴史を書く。それは現在の環境問題のことを考える場合にも非常に意味があるでしょう。その場合には間違いなく、人間、人類が主語になって歴史が書かれるはずですが。これは私たちが積み重ねてきた歴史学的な知識をほとんど使わずに書くことができるものですから、先ほどの遺伝子の話と同じですが、新しい世界史のハード版だと言えるかと思っています。

それに対して、今回は既存の歴史学

の成果を捨てずに活用するソフト版の世界史の可能性についてお話し、それに対して色々のご意見をいただいたわけです。いただいたご意見やご質問に、すぐに明快にお答えすることができませんが、もう一度いま考えていることを簡単にご説明しておきます。

17-18世紀のヨーロッパでは、宗教的な弾圧による人の移動が盛んだったとしばしば言われます。ところが、同じ17-18世紀に中国から沢山の人が東南アジアに移り住みます。インドからも多くの人々が東南アジアやペルシャに移動しています。アジアでも人の移動が盛んなのです。その意味で、これは地球規模で関連を持った一体の動きだとも言えそうです。そこで、ヨーロッパ史やアジア史ではなく、ユーラシア史というレベルで過去をとらえなおしてみれば、従来の歴史解釈とは別の書き方や理解の仕方があるのではないかと思うのです。「ヨーロッパ」という特権的で閉ざされた枠組みの中ですべてを解釈するのではなく、ユーラシア全体で生じたことをまとめて解釈するということです。

その場合も誰を主体にして歴史を書くかという問題はあるでしょう。世界中の人々が「これは私たちの歴史だ」と思える世界史を書くのが私の理想で

すから、「人々」または「人類」を最上位の主語にせざるをえないといまのところは思っています。いずれにせよ、「日本」を主語とした戦前の「世界史の哲学」の方向には行かないと思っています。いま言えることはここまでです。ご注意を受け止めつつ、これから作業を進める過程でさらに考えてゆきたいと思います。今日のところは、このくらいで勘弁いただけないでしょうか（笑）。

新しい世界史と共生

小林 それでは会場の事業推進担当の皆さんにコメントをお願いします。

信原 羽田さんのお話と中島さんの質問を興味深く聞かせていただきました。私が理解する限りでは、羽田さんが書かれようとするような歴史を書くためには、歴史を書く主体という観点をとりあえず放棄することが必要だろうと思います。例えば、これからの世界の歴史をどうするかといった目論見は一旦捨象して、かつて世界はどのように歩んで来たのかという観点から客観的に歴史を描くことが可能だと信じてやっていくことが必要なのだと思います。

そのうえで、それを可能にするために近代歴史学の実証的な方法は極めて

有効な手段として使えると羽田さんはお考えになっていると思います。しかし、それに対して根本的な疑義というか、もっとも根本的な哲学的な反省からすると、そういう現代の実証的方法ですら、やはりある観点からの一つの見方にすぎないと言われてしまいます。しかし諸々の根源的には主観的な見方の中でも、比較的客観的なものがないわけではありませんし、そういうものなしに我々の社会や文化が成立するわけでもないと思います。そういう意味では、近代の実証的な歴史記述のもつ有効性を私も信じたいと思います。これは科学史に関してもまったく同じで、相対的に客観的な描写というものはありうると信じます。そういう観点から、ヨーロッパではなく、ユーラシアという一つの生きた全体というものを想定したときに、あるいは世界という生きた全体を想定したときに、そこに浮かび上がる生きた歴史を記述することは、我々が挑戦すべき重要な課題だろうと思いました。

原 ある種の交通のネットワークみたいなものを描き出す、それも国民国家という限界を相対化する梃子のようなものとして描き出すことで新しい歴史を構想するというのは、私は非常に面白いと思って伺っていました。ただ

どこかで、無限に広がるネットワークを考えるわけにはいかないで、さしあたりの境界を作らなくてはいけない。それがまずユーラシアという形でご提案されているのだというふうに了解しています。それで、そのネットワークを記述していくときにどこで、実はいちばん大きな決定がなされているかといいますと、これが歴史家としての仕事のいちばん重要なポイントになると思うのですが、資料を選定し、批判し確定する作業のところで、実はかなりの部分が決まってしまうのではないかという気がします。そのあたりの作業を例えば方法的に組み上げることによって、国民国家という特定の視点の相対化を導くはずのネットワークの提示そのものが、それ自体一つの特定の主体の視点に偏ってしまうことを避けるための手法みたいなものを考える可能性はあるかもしれない。ひょっとすると歴史学の世界ではそういう試みが、すでに具体的に行われているのではないかと思い、この点をもう少し伺えればと思いました。

村松 歴史ということ言えば、西洋の歴史ということだけではなく、例えば中国を考えた場合にも、それぞれの非常に特化された歴史というものがあるわけで、さらに哲学史や美術史と

してはどうかというお話がありました。私は文学を仕事の中心にしているのでやはり文学史とか、言語とか文法とかってということが非常に気になりました。どういう主体で歴史を記述していくかということと、どういう言葉で——これは何語でという狭い意味ではなくて——、どういう文法によって記述するかは密接に関係していて、視点の設定というより、私たちに見えてくるもの自体が非常に限定されてくることにもなると考えました。私たちは基本的に史料を選んで読み込むわけですが、その視点のとり方によっては、記述可能な物語というか、継続的な一つの一貫した歴史が語れなくなる以前に、見えてこないのではないかと。羽田さんの今後のお仕事では、そういう意味での文法や言語を選択する時の見通しが立つかもしれないと思って、お仕事を楽しみにさせていただき、コメントとしたいと思います。

羽田 実は、共生という言葉は今日初めて使いました。今日の集まりのタイトルとしてこの語がすでに与えられていることを一週間前に知って取り入れただけです。これまで、新しい世界史という語はよく使ってきましたが、共生の世界史は今回がはじめてです。現代世界の閉塞状況を打ち破っていく

ための概念として、小林さんが「共生」を政治的、意図的にお使いになっていることを知っていたからです。

私が「新しい世界史」という言葉を使うのも同様のニュアンスからです。従来の世界史は、世界の現状を後押しし、追認するような存在になっています。しかし、学問であるからには、現状に後からついていっているだけではだめで、人々の常識や社会の現状を超えて、人々になるほどそうか、そういう考え方があるのかと思わせるような新しい世界のデッサンを示さねばいけないのではないかと思うのです。そのためには、たとえ難しくてもあえて「新しい世界史」という旗を掲げるのが、歴史学者としての責務だと考えます。歴史研究者の中には、例えば日本の歴史を研究する人や、フランスの歴史を研究する人がいます。日本という国も、フランスという国も現実に存在しているわけですから、それはそれでよいと思います。私は「日本史」も「フランス史」も、それらの研究も否定はしません。しかし、それらに加えて、世界市民、あるいは地球市民を創り出すために、あえて新しい世界の歴史を書くべきではないかと思うのです。書かないよりは書く方がよい。実際の書き方については、先ほどからご質問

いただいているように、非常に難しく微妙な問題があることは承知しています。何度も繰り返しますが、作業をしながらこれらの問題の解決方法を考えて行きたいと思います。

そういう意味では、これは問題解決型の研究と言えるのかもしれませんが。環境問題はどのように生じてきたのかということを理解してもらうために環境の世界史を書くことになるからです。歴史を書くということは、その時点ですでにその筆者の立場や問題意識が当然存在します。古代史の研究者の中には現代的な問題意識は必要ないと思っている人がいるかもしれませんが、私はそんなことはないと確信しています。歴史を書く時に何を切り口にするのかということも、現代に生きるその研究者の感性や問題関心によって異なるのです。

私は今日ご説明した計画を一人だけで実行しようと思っているわけではありません。一人でやれることには限界があります。ある意味では政治的ですが、できるだけたくさんの人たちに私の考えをお話しし、その目指すところや意義をご理解いただくとともに、自分自身の考えを整理し、さらに洗練させてゆきたいと考えています。この場を借りて問題提起をさせていただいた

のもそのためです。正直に言って、哲学者とこれだけ議論ができるとは思っていませんでした。とてもうれしく思っています。むしろ、歴史学者に対しての方が、この種の話はなかなか通じないのかもしれませんが。今日頂戴した多くの質問やコメントも有意義な示唆と受け止めて、今後真剣に考えて行きたいと思っています。

歴史を書く主体と政治

中島 いま羽田さんが図らずも政治、政治的という言葉をお使いになりました。実はそれを私はまさに申し上げようと思っていたものです。それには二つ理由があって、一つはUTCPという運動体自身が、今後どういうことを中心的な問いとして掲げていくかというときに、政治の問題を避けては通れないと考えているからです。哲学と政治、あるいは歴史学と政治。その政治というものを問うときに、先ほど羽田さんに私からお伺いした、「誰が」という問題、「何を」という問題が、切っても切り離せない仕方です。主体というのは何といっても政治的なものです。それは、主体が人類であろうかあるいはDNAであろうか変わりません。いずれであっても、主体が政治的であるこ

とは貫かれていると思います。少なくとも、それが政治的であるということをもるで知らないかのように振舞わないことは大事なことでないでしょうか。

この場合、弱さということ定義しなければいけない局面があるかもしれません。つまり、弱さの主体、主体の弱さっていうことを言わなければいけない局面があるかもしれません。また他の局面では、その主体概念自身を、まさに脱構築して用いなければならないかもしれません。あるいはまったく逆に、複数の主体を立てなければいけない局面も考えられます。さきほどの村松さんの言葉にひきつけて言いますと、複数の文法を同時に用いるようなハチャメチャなことになるかもしれません。しかし、それぞれは私たちが出会うであろう非常に具体的な問いや問題と連動しているわけです。私たちは、すべての問題を一律に切れるような方法論や武器をたぶん持っていないのだらうと思います。

今日、羽田さんに、新しい世界史、共生の世界史というアイデアを伺って、快哉を叫ぶようなものが自分の中にあります。それはやはり、そのアイデアがラディカルな態度、方向性を示していただいているからなのだろうと思

います。私は戦前の記憶を持ち出しましたが、そんなものに簡単に還元されるお話をなさっていないことは、私自身が十分わかったうえで質問いたしました。重要なことは、ある態度の問題だと思うのです。それは具体的にやってみなければ、何も出てこないではないかということです。具体的なプロセスを積み重ね、それを通じて出てきた作品についてまた議論を積み重ねていく。こうしたプロセスと議論しかないのだらうと思っています。これまでは、そういったものを省略した上で、結果として世界史の哲学なり世界史をドンと出してきたのでしょうか。

しかし、重要なのはその手前です。例えば技術の話でいえば、補助技術のレベルの話がものすごく大事だということ。今日私は学ぶことができたわけですが、それにならっていいますと、結果としての世界史を可能にしている、数多くのプロセスが重要だということです。そして、主体の問題にもう一度立ち戻ることができるのは、まさにこのプロセスにおいてであるのだと思います。このような手応えを今日はいいただきました。

小林 最後に司会として、また、羽田さんをお願いをした張本人なので、一言申し上げます。

羽田さんを UTCP にお迎えできてよかった、志を一つにするということはいま中島さんが言った通りで、本当によかったなと思います。

さて、中島さんが提起した問いに、私は歴史家ではありませんが、私だったらどうであるかというかたちで考えましたのでお答えいたします。

中島さんは、世界史を書くことは不可能だとまずは言います、ということを行っている。つまり、世界史を書くことは可能だということから出発しないで、世界史を書くことは、あるいは人類史を歴史として書くことは不可能だということがわかった上で、世界史を書くということをしなければならぬだろうと。そう私は理解しました。

世界史を書くことの包括的な可能性というものに賭けていた戦前の世界史の哲学とほとんど同じですが、わずかに何が違うかといえば、我々は世界史を書くことが不可能であること、あるいは世界史を書くことを断念しているということにおいて世界史を書くしかないということを知っている。それがほとんど同じだがわずかに違うということに対する私なりの回答です。

この問題は、橋本さんがキニーネのところでおっしゃった重要な問題と関

係します。キニーネの歴史的な事実のデータを細かくとっていくことはできます。キニーネがどこから出発して、誰が持ってきて、どういうふうに入ってきたのか、誰が戦争したのか。そうしたデータは無数にあるけれども、しかし歴史というものは、橋本さんがおっしゃったことですが、結局は誰がこれを使おうとしたのか、何のために使おうとしたのか、こういう意思の問題を避けて通ることはどうしてもできないのです。人類の歴史を遺伝子で解明するという非常に科学的な歴史、もしくはビッグ・ヒストリーというデータで出来上がる世界史というのはきっと何の問題もなく可能かもしれないが、おそらくそれでは我々にとっての歴史の根本的な問題には触れないだろうと思うのです。これに触れるためにはどうしても、橋本さんがおっしゃった意思という問題に触れざるをえない。まさにその意思という問題に触れるからこそ歴史というのが政治的なニュアンスを帯びざるをえない。そうすると最終的には、その歴史＝意思か、歴史での意思か、意思への歴史かは我々にはわからなくなっています。しかし、なおかつそれをどういうふうにするのかがここで問われ始めているのではないかと。

来るべき世界市民を発見するために

小林 今日羽田さんのお話を私なりに受け止めると、私の考え方は、例えばユーラシアの17、18世紀の歴史を包括的に書くことはできない。これを断念した上で、どのようにしてその歴史を書くのかという問題になると思いますので、事実というステータスにこだわります。17、18世紀の、2世紀分のユーラシアに関するあらゆるデータを全部コンピューターに導入したとしても、それは事実すぎず、歴史ではないだろう。にもかかわらずユーラシアの歴史を書こうとするなら、当然包括的にすべてを支配するというこの考え方、つまり前後の史実からできあがっているすべてを書くということを断念する必要があるのではないか。

逆に言えば非常に小さな歴史でもいいのかもしれない。そこに私の発想は入り込んだのです。たぶん大きな歴史を書こうとしてはならないだろう、タイムスパン的には非常に広大な歴史を書くことはひょっとすると、きわめて小さいものの、小さい人の、小さい何か、小さい歴史を書くことになるかもしれない。そうなってもいい。その小さい歴史の中に実はすべてのユーラシアの歴史が入っているような形

での歴史記述というのも考えざるをえないだろう。そのためにこの意思、人間の意思ということを中心にしてみる。しかし意思というのは必ず政治的で、必ず権力的で、必ず支配的なわけだから、それを中心に書いてきた歴史の書き方そのものを、つまり、力への意思そのものを解体する方向の記述が必要であろう。しかし、そうするとそんなことははたして可能だろうか。私は可能だと思うのです。

それは最近の哲学的なことと言えば、まさに生態学をベイトソンが言った意味でのエコロジーや、アフォーダンスと言われるような、我々の知覚的世界の把握の仕方そのものを、主体の中心ではないところで考え始めている人間の歴史についての考え方そのものが、まさに歴史に応用できるかもしれない。つまり歴史のアフォーダンスという問題が考えられるかもしれない。地理的な概念でのユーラシアというものを歴史的な空間として成立させている膨大な地形図があるとして、もしそれが、アフォーダンスによって記述できれば、その記述を通じてユーラシアも、その2世紀分のユーラシアの歴史空間そのもの全体が振動するということが起こるのではないか。それは記述的なものではなくて、これが私の今日の結論で

すけど、発見的なものなのではないか。

歴史を誰が書くのかという問いは、同時に何のために歴史を書くのかという問いになるのです。何のためにユーラシアの歴史を書くのか。あるいは人類という幻の主体の方に我々は一步踏み出さなければならない。とはいえ、人類という主体の共有の歴史を書くと言っても、人類のつまり世界市民と言っても、我々は世界市民というものがどういふものなのか誰も一度も知ったことがない。世界市民というものの言葉は、カントも使っている簡単な言葉ですが、おそらく我々は、まさに世界市民を発見するために歴史を書くのではないのでしょうか。我々が世界市民だから書くのではなくて、世界市民というコンセプトが主体ではない主体を可能にすることを実証するためにこそ歴史は書かれなければならないのです。そのためにはビッグなユーラシア大陸の歴史を全部包括しているような歴史ではなくて、まったく違うタイプのとても小さい歴史かもしれないが、それが2世紀分のユーラシア空間のすべてを

振動させる、あるいは発見させる、そういう意味で歴史を発見する。と同時に、我々自身がそういう歴史を発見する主体としての、世界市民を発見する。こういうダブルの壮大な試みではないかと思うのです。

来るべき主体ともいうべき、来るべき世界市民というものを羽田さんから私が受け止めたもっとも大きな哲学的なインプリケーションだと思います。それは何も歴史だけではない。我々が行っているすべての活動、UTCPのすべての活動はやはり発見的なものではないかと思っています。それは何かを確認するためではなくて、何のために人文科学をやるのかってということに対する、若い人々の問いに対する一つの答えとして、それはいまだ知らないもう一つの私を、我々を、人類を、世界市民を、発見するためになるという、暫定的な答え方ができるのではないのでしょうか。それは歴史学も、哲学も、認知心理学も、脳科学も、すべて同じだと思うのです。